

女子学生の宗教意識について

寺てら
川かわ
幽ゆう
芳ほう

(京都女子大学)

一、この調査の目的、および、これまでの経過について

この研究は、社会的態度測定の方法を用いて女子大学生の宗教的態度——特に仏教に対する態度——をとらえることによつて宗教教育の基礎的資料づくりをおこなおうとする目的のもとに、京都女子学園仏教文化研究所の助成をうけて、昭和四十七年七月から、京都女子大学の小田義彦・大塚義孝・長安章俊・寺川幽芳の共同研究として継続している研究の一部である。

これまでの研究の経過については、すでに京都女子学園仏教文化研究所『研究紀要』に発表しているもので、ここではその詳細について述べることは差しひかえるが、参考までに今日までの経過の概略を記すと、まず第一段階として態度測定尺度の作成をおこない、ついで、第二段階として、その尺度を用いた第一回本調査を実施した。

すなわち、態度測定尺度の作成は、学生・宗教関係者・一般社会人等三一五〇名を対象とする予備調査から得た一、二三五名の回答のなから、仏教乃至宗教に対する意見を抽出し、その文章表現の統合・整理など数段階の検討作業

資料 ① 宗教意識調査 (T-1)

□ お願ひ

- この調査は、日本のいろんな人たちの宗教（特に仏教）に対する考え方をありのままに把握するために計画されたもので、調査結果は統計的な分析に使用され、あなたにご迷惑をかけたたり不利益を及ぼすようなことは全くありません。もちろん無記名ですから、どうぞありのままの意見を記入してください。
- 記入の方法は、左側の1～30までの意見を読んで、それぞれ意見に対する「あなたの意見」を、右側の「大いに賛成・賛成・どちらともいえない・反対・大いに反対」という五段階の答えのあてはまるところへ○をつけてください。

< 意見 >

1. 日常は仏教について特別な意識もなく、信じているとも思っていないが、苦難に遭った時や何かにすがりたい時には、思わず手をあわせて拜みたくなる。
2. 人間が何らかの心のささえをもつことなしに生きてゆけないことは判る。しかし、それは宗教以外のものでもよく、要は自分の心を豊かに生きられればよい。
3. 仏教の強く人間観や人生観には深い真実が示されているので、心の奥底から深く感銘するところがあり、生きてゆこうへの究極的な心の支えである。
4. 仏教は祖先伝来の家の宗教としてかわりはあるが、先祖の供養や法事は日常の慣習のようなもので、その教えについて深く考えたことはない。
5. 本来の仏教はすばらしいものとは思いますが、現在の寺院や僧侶、信者などのあり方をみると、釈迦の説いた本来の姿や成立当時の純粹さを失っているで信じられたい。
6. 仏教は自己のより大いなる成長、真の自己実現を可能にし、人間を本当の意味で人間らしく育てあげる力をもっている宗教である。
7. 仏教の宗教的価値はわからないが、仏教が日本人の生活に深く結びつき、芸術や文化等に刺りしれない影響を与えてきた点で興味と関心をもっている。
8. 一般的に言う「宗教の所説はいずれも非科学的であり、信するに足るだけの客観的根拠がない、科学的に証明できないもの」を信じていることはできない。
9. 人生には理哲学や科学のみで解決できぬ問題があり、その点に関して、仏教の強く物の見方や考え方には、現代人の求めているものに応えるものがある。
10. 特定の宗教は信じていないが、宇宙や自然界に人間以上の大きな力が存在することは信じる。しかし、それが特定の神や仏というものには結びつかない。
11. 仏教といえは、死後の世界のものとか、縁起の匂いと葬式のような陰気なイメージしかなく、現在の生活に直結した身近なものとは思えない。

宗教意識調査(T-1)記入欄

(学校名又は職業)		
(学科・専攻・学年)	(年令)	才
(性別)	宗	
(家庭の宗教)	教	
(出身高校の区分) ○をつけてください		
1 国・公・立		
2 私立		
4 宗教に関係のある学校()		
5 宗教に関係のない学校 ()		

< あなたの意見 >

1. 賛成 賛成 どちらともいえない 反対 大いに反対
2. _____
3. _____
4. _____
5. _____
6. _____
7. _____
8. _____
9. _____
10. _____
11. _____

12. 仏教は日本人の生活に最も深く浸透している宗教であり、その教えは倫理道徳につながり、社会生活の道徳的基盤となっている。
13. 人生には科学や理性で割りきれない不可知なものがあり、その点で宗教の必要性はわかるが、実際に自分がそうした場合に直面しないと何ともいえない。
14. 一つの宗教を信じると、その宗教の世界観や人間観に拘束されて自由な生き方が出来なくなり、何か心の狭い人間になるような気がする。
15. 仏教が歴史的にも地域的にも世界的なひろがりにおいて信ぜられてきた事実、その教えに人間の心の糧となる必然的な真理があることを示している。
16. 人間が生きてゆくうえで何かにすがらねばならないような場面が生じるのはわかるが、現在の自分は幸福であり、特に宗教の必要性を感じていない。
17. 宗教を信じなくても、別段毎日の生活を送るうえで何の不便も感じない。宗教はしよせん苦しい時の神のみであり、一種の気やすめにはすぎない。
18. 仏教は日本の文学や思想・芸術など、その文化に大きな影響を与えてきた。日本人の心情に適した教えとして、その精神的基盤となっている。
19. 仏教については、ある程度の理解と関心はもっているが、それ以上に“信じる”というような状態にはない。また特に積極的に求めようという気もない。
20. 人間は社会生活において、物質的に平等に、あらゆる疎外から解放された段階で初めて救われ、本当の幸福が得られるのであり、宗教で救われるとは思えない。
21. 仏教の教えにしたがって生きること、人の世に生きる喜びと感謝が体得でき、充実した生活、明るい幸福な日々を送ることができるとは思えない。
22. 神にせよ仏にせよ、結局は自己のうちなるものの投影であり、最後に頼れるのは自分しかない。自己こそ絶対であり、自分の方で充分生きてゆける。
23. 宗教とか信仰ということでは仏教を考えたことはないが、仏教的な物の見方や考え方には、思想的に関心を抱いている。
24. 仏教は祖先伝来の宗教であり、先祖代々の家の宗教であるから、仏を拜み、先祖を供養することは当然のことである。
25. 仏教にとどまらず、どのような宗教の教えにも各々もともとどうなっている点があるのと同じに神や仏を拜み、その教えを仰いでゆけばよい。
26. 人間には理性や良心があり、自分の力で物事を解決する方が合理的である。神や仏にすがればよいという安易な考えは、人間に与えられている可能性を實現してゆくうえでかえって障害になる。
27. 仏教は社会生活に深く浸透しているので、日々の生活のなかで知らず知らずのうちに仏教的な物の見方や考え方が身につけているように思う。
28. 現在の仏教は、自分の生活と遠くかけ離れた形式だけのものであり、せいぜい日本文化の理解や古文を読むうえで必要な知識でしかない。
29. もし神や仏がおられるなら、悪人がさばったり悪世の不幸な世起るのか？ すべてのことに疑問をもつことを寛えてしまった現代人にとって、心底から何かを信ずるといふようなことはもはや不可能になっている。
30. 仏教について深い理解もなく、また、特に信じているという意識もないが、古寺を訪れたり仏教を拜することは好きであり、そのような時は心がなごむ。

12. _____
13. _____
14. _____
15. _____
16. _____
17. _____
18. _____
19. _____
20. _____
21. _____
22. _____
23. _____
24. _____
25. _____
26. _____
27. _____
28. _____
29. _____
30. _____

を経て、最終的に、資料①のような、好意的意見群10項目・中間的意見群10項目・非好意的意見群10項目、合計30項目から成る調査表「宗教意識調査(T-1)」を完成した。

そして、昭和五十年度的において、この調査表を用いた第一回本調査を実施し、その結果については、現在なお検討をつづけている。

したがって、ここでは、その本調査の結果の一部をとりあげて私見を申し述べたいが、この本調査のさらに詳細な結果等については、近日発行予定の京都女子学園仏教文化研究所『研究紀要』第6号に掲載される予定であり、是非本稿とあわせて通覧していただくようお願いしたい。

本稿は、昭和五十年度的に実施した第一回本調査の結果の一部について、真宗連合学会第二十三回大会において、研究員の一人として私見を発表したものであり、京都女子学園仏教文化研究所『研究紀要』第6号の論考は、その後、本稿の私見も交えた研究員の共同発表として提出したものである。

したがって、その内容の一部、特に調査結果の資料等については重複しているものもある反面、相互に未発表のものも含まれているので、その点ご諒解いただくと共に、前述のように、本調査までの経過や手続き等については本稿より『研究紀要』第6号に詳しいので、できるだけ双方を参照していただくようお願いしたい。

二、第一回本調査の結果について

① 全体の結果とその傾向

「宗教意識調査(T-1)」による第一回本調査は、京都女子大学文学部・家政学部・短期大学の学生二、八二三名(回収実数)を対象として実施した。

グラフAは、その全体の結果をグラフにしたものであるが、グラフの数値は、調査表設問項目に対する回答に対して「おおいに賛成」5点、「賛成」4点、「どちらともいえない」3点、「反対」2点、「おおいに反対」1点という評点を与えて数字化し、全体の平均値を出したものである。

尚、グラフ化に際しては、検討の際の便宜上、資料①の調査表設問項目を、好意的意見群(A1~A10)、中間的意見群(B1~B10)、非好意的意見群(C1~C10)の順に配列しなおしたが、この序列は、我々が仏教への最も強い好意的意見と考えたものから最も強い非好意的意見と考えたものへという方向で配列されている。(ここでは、参考のため、グラフの項目の末尾に調査表での番号も記入した)

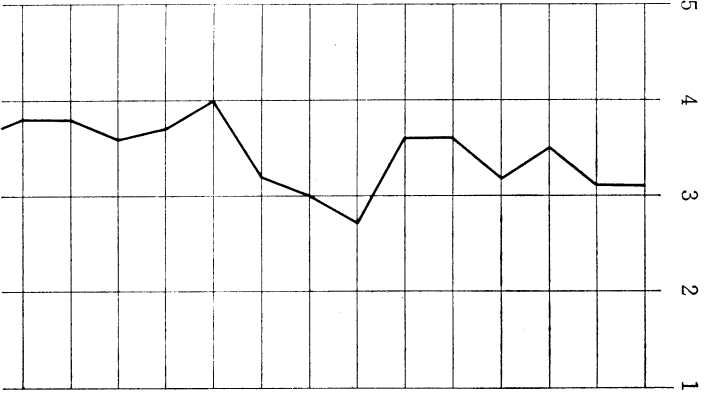
グラフAについて、まず注目されるのは、プロフィールが評点3(どちらともいえない)の線を中心にして、好意的意見群から中間的意見群へかけては左方(賛成の側)へふくらみをみせ、非好意的意見群では次第に右方(反対の側)へとふくらんでいることである。

すなわち、好意的意見群や非好意的意見群においてよりも中間的意見群に対する肯定度が概ね高く、しかも、非好意的意見群に対してよりも好意的意見群に対しての肯定度が高いということである。

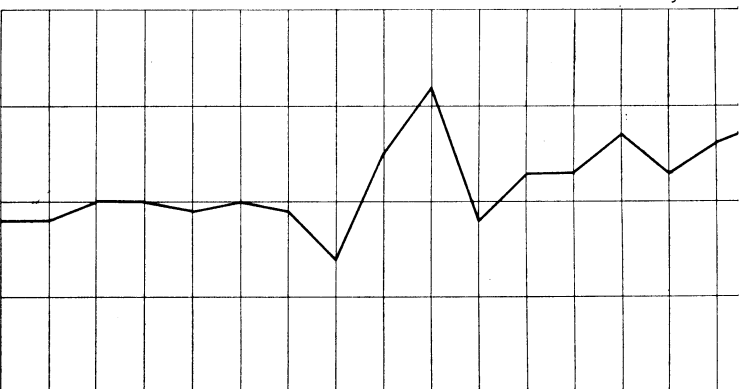
これは、彼女らが仏教乃至宗教に対して概ね好意的な態度をもっているということを意味するが、それは、必ずしも自己の生活経験において確立した主体的なかかわりをふまえたものというよりも、むしろ、多分に心情的あるいは知的なレベルでの評価であることを示しているとみられる。

即ち、好意的意見群のなかで最も高い賛同を得ているのはA10(仏教について深い理解もなく、また、特に信じているという意識もないが、古寺を訪れたり仏像を拝することは好きであり、そのような時は心がなごむ)であり、ついで、A5・A6にみられるような、「仏教の世界的ひろがり」とか「日本文化の精神的基盤」としての評価であって、例えばA1や

- A1 仏教の脱く人間観や人生観には深い真実が示されているので、心の奥底から深く感銘するところがあり、生きてゆくうえの究極的な心の支えである。(3)
- A2 仏教は自己のより大いなる成長、真の自己実現を可能にし、人間を本当の意味で人間らしく育てあげる力をもっている宗教である。(6)
- A3 人生には理性や科学のみで解決できぬ問題があり、その点に関して、仏教の脱く物の見方や考え方には、現代人の求めていくものに感えるものがある。(9)
- A4 仏教は日本人の生活に最も深く浸透している宗教であり、その教えは倫理道徳につながり、社会生活の道徳的基盤となっている。(12)
- A5 仏教が歴史的にも地域的にも世界的にも世界的なひろがりにおいて信ぜられてきた事実は、その教えに人間の心の置てなる必然的な真理があることを示している。(15)
- A6 仏教は日本の文学や思想・芸術など、その文化に大きな影響を与えてきた。日本人の心情に適した教えとして、その精神的基盤となっている。(18)
- A7 仏教の教えにしたがって生きることで、人の世に生きる喜びと感謝が体得でき、充実した生活、明るい幸福の日々を送ることができる。(21)
- A8 仏教は祖先伝来の宗教であり、先祖代々の家の宗教であるから、仏を拝み、先祖を供養することは当然のつとめである。(24)
- A9 仏教は社会生活に深く浸透しているので、日々の生活のなかで知らず知らずのうちに仏教的な物の見方や考え方が身についているようだ。(27)
- A10 仏教について深い理解もなく、また、特に信じているという意識もないが、古寺を訪れたり仏像を拝することは好きであり、そのような時は心がなごむ。(30)
- B1 日常は仏教について特別な意識もなく、信じているとも思っていないが、苦難に遭った時や何かにかかりたい時には、思わず手をあわせて拝みたくなる。(1)
- B2 仏教は祖先伝来の家の宗教としてかわりはあるが、先祖の供養や法事は日常の慣習のようなもので、その教えについて深く考えたことはない。(4)
- B3 仏教の宗教的価値はわからないが、仏教が日本人の生活に深く結びつき、芸術や文化等に測りしれない影響を与えてきた点で興味と関心をもっている。(7)
- B4 特定の宗教は信じていないが、宇宙や自然界に人間以上の大きな力が存在することは信じる。しかし、それが特定の神や仏というものには結びつかない。(10)



- B5 人生には科学や理性で割りきれない不可知なものがあり、その点で宗教の必要性はわかるが、実際に自分がそうした場面に直面しないや何ともいえない。(13)
- B6 人間が生きてゆくうえで何かにはならねばならないような場面が生じるのはわかるが、現在の自分は幸福であり、特に宗教の必要性を感じていない。(16)
- B7 仏教については、ある程度理解と関心はもっているが、それ以上に“信じる”というような状態にはない。また特に積極的に来ぬようという気もない。(19)
- B8 宗教とか信仰ということで仏教を考えたことはないが、仏教的な物の見方や考え方には、思想的に、哲学的に関心を抱いている。(23)
- B9 仏教にとどまらず、どのような宗教の教えにも各々もつともだとうな点があるので時に高じて神や仏を拝み、その教えを仰いでゆけはよい。(25)
- B10 現在の仏教は、自分の生活と遠くかけ離れた形式だけのものであり、せいぜい日本文化の理解や古文を誦むうえで必要な知識ではない。(28)
- C1 人間が何らかの心のささえをもつことなしに生きてゆけないことは判る。しかし、それは宗教以外のものでもよく、要は自分の心を豊かに生きられればよい。(2)
- C2 本家の仏教はすばらしいものと思うが、現在の寺院や僧侶、信者などの方をみてみると、釈迦の説いた本来の姿や戒律当時の純粋さを失っているので信じられない。(5)
- C3 一般的に言って宗教の祈願はいつでも非科学的であり、信ずるに足るだけの客観的根拠がない。科学的に証明できないものを感じることはできない。(8)
- C4 仏教といえば、死後の世界のものとか、線香の匂いと葬式のような陰気なイメージしかなく、現在の生活に直結した身近なものとは思えない。(11)
- C5 一つの宗教を信じてと、その宗教の世界観や人間観に拘束されて自由な生き方が出来なくなり、何か心の狭い人間になるような気がする。(14)
- C6 宗教を信じなくても、別段毎日の生活を送るうえで何の不便も感じない。宗教はよしせん苦しい時の神だのみであり、一種の気やすみにすぎない。(17)
- C7 人間は社会生活において、物質的に平等に、あらゆる疎外から解放された段階で初めて救われ、本当の幸福が得られるのであるが、宗教で救われるとは思えない。(20)
- C8 神にせよ仏にせよ、結局は自己のうなるもの投影であり、最後に頼れるのは自分しかない。自己こそ絶対であり、自分の力で充分生きてゆける。(22)
- C9 人間には理性や良心があり、自分の力で物事を解決する方が合理的である。神や仏にすがればよいという安易な考えは、人間に与えられている可能性を表現してゆくうえでかえって障害になる。(26)
- C10 もし神や仏がおられるなら、悪人がのさばったり現世の不幸はなぜ起るのか？ すべてのことに疑問をもつことを憂えてしまった現代人にとって、心底から何かを信ずるといふようなことはほぼ不可能になっている。(29)



A2のような「生の究極的な依拠」とか「人間の真の自己実現を可能にする」といった、主体的なかわりをふまえた評価を必要とする項目への肯定度は低い。

それは、とりわけ、好意的意見群のなかであって唯一つ否定の側に位置づけられたA7（仏教の教えにしたがって生きることで、人の世に生きる喜びと感謝が体得でき、充実した生活、明るい幸福な日々を送ることができる）への反応にもよく示されている。

中間的意見群（B1～B10）のプロフィールは、はっきりと右下りの傾向をみせており、好意的意見に近い中間的意見から非好意的意見に近い中間的意見へと、しだいにその賛同率が低下していることがうかがわれるが、そのなかにおいても、例えば同じ数値を示して最も高い賛同を得ているB3とB4にみられるように、仏教に対して日本人の精神的基盤にかかわる役割りへの評価にもとづく興味と関心を示しながらも、それが主体的な事態としてかかわるまでには至らない状況が読みとられる。

そして、B10（現在の仏教は、自分の生活と遠くかけ離れた形式だけのものであり、せいぜい日本文化の理解や古文を読むうえで必要な知識でしかない）への否定や、B1、B7への高い賛同をあわせ考えるとき、ここでも、女子学生の宗教的関心が決して希薄なものではないにもかかわらず、それが具体的な私のことがらとしての宗教に結びつかないことがうかがわれる。

その理由は、勿論さまざま要因が関与していると思われるが、このグラフでは、例えば非好意的意見群のなかで、C1とC2の項目が他の項目とは反対に高い賛同を得ていることが注目される。

特にC1（人間が何らかの心のささえをもつことなしに生きてゆけないことは判る。しかし、それは宗教以外のものでもよく、要は自分の心を豊かに生きられればよい）は、全項目中最高の賛同を得ており、ここには、いわゆる心のささえの必要性

を認め、生き甲斐を求めながらも、それが理念としてもまた実際問題としても必ずしも宗教に結びついていないことが示唆されている。

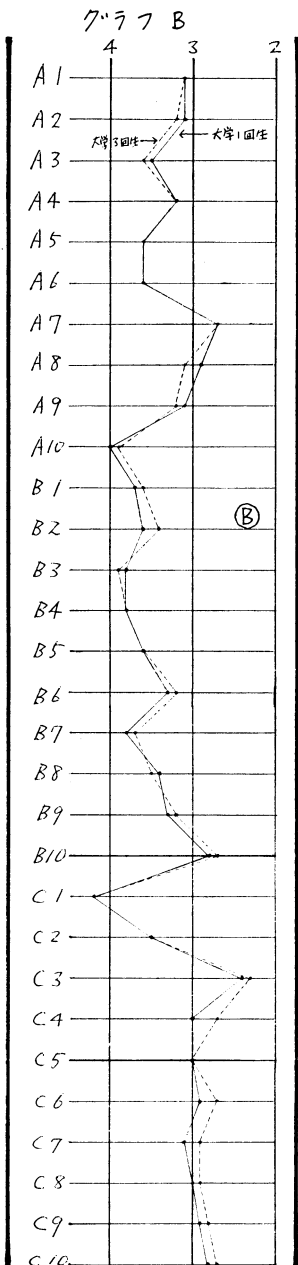
このC1の数値の意味は、すでにこれまでに検討してきたところとあわせて理解すべきであるが、更にもう一つ、非好意的意見群のなかでC1と共に肯定の側の反応を示したC2（本来の仏教はすばらしいものと思うが、現在の寺院や僧侶、信者などのあり方をみていると、釈迦の説いた本来の姿や成立当時の純粋さを失っているので信じられない）との関連も決して無視されてはならないであろう。

最後に、非好意的意見群のなかで最も低い賛同の数値を示したC3では、彼女達が科学と宗教との関係についても、かなりはつきりした理解をもっていることがうかがわれるのであり、これも、最初に述べたような、多分に知的あるいは心情的レベルでの宗教に対する好意的態度という、女子学生の宗教意識の特徴を裏付ける一つの証左と考えられよう。

② 一回生と三回生の結果とその傾向

グラフBは、第一回本調査のなかから、大学（文学部・家政学部）一回生と三回生の数値をぬき出して対比したものである。

調査人員は、一回生が五六〇名、三回生四三九名であるが、この二つのグラフにみられる特徴としては、前項で指摘したような一連の傾向、すなわち、好意的意見群への肯定度の増加と非好意的意見群への肯定度の低下の傾向が、一回生においてよりも三回生へと進むにつれてより明瞭になり、また、これとあいまって中間的意見群のふくらみも三回生では総体的に低くなっていることである。



このことは、一回生から三回生へと進むにつれて宗教への好意的態度が増加することを示しているが、その傾向は、好意的意見群においてよりも非好意的意見群において著しい。

すなわち、三回生にみられる宗教への好意的態度の増加は、勿論、好意的意見群においても認められるが、それにも増して中間的意見群でのあいまいな態度の減少と非好意的意見群を中心とする非好意的見解の減少という形で進行していることがうかがわれる。

この場合、前項で指摘したような、主体的なかかわりにもとづく好意的意見よりも、心情的あるいは知的レベルでの好意的意見に対する肯定度が高いという傾向は依然として認められるが、しかし、例えば、好意的意見群のA8・A9に対する肯定度の増加、中間的意見群のB2・B6・B7に対する肯定度の低下等には、好意的態度の増加が心情的なあるいは漠然たる好意から一步進んで、かなり生活経験に根ざした宗教観なり仏教観が育っていることをうか

がわせる。

また、特にグラフのうえで差がひろがっている非好意的意見群の変化をみると、C1・C2・C5が変化をみせていないのに対して、C4（仏教といえは、死後の世界のものとか、線香の匂いと葬式のような陰気なイメージがなく、現在の生活に直結した身近なものとは思えない）や、C6（宗教を信じなくても、別段毎日の生活を送るうえで何の不便も感じない。宗教はしょせん苦しい時の神だのみであり、一種の気やすめにすぎない）といった項目の肯定度が着実に低下していることも、いま指摘したような三回生グラフの特徴を裏付けるものであるといえよう。

もっとも、このような傾向が、果していかなる要因によるものであるかということについては、未だ結論を出せる段階ではない。

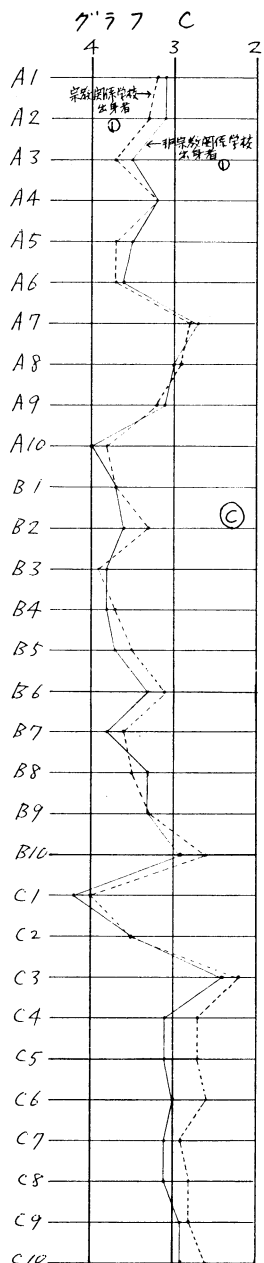
それが果して宗門立大学としての宗教教育の結果によるものか、あるいは、年令と社会的経験の積み重ねによる一般的傾向として他の非宗教関係学校の学生にも認められる傾向なのかといった問題も、したがって、今後他大学での調査を試みることによって明らかにしなければならぬ課題である。

③ 出身学校別の結果とその傾向——一回生について——

次に、グラフCは、大学の一回生（調査人員五六〇名）について、出身高校にしたがい、宗教関係学校出身者と非宗教関係学校出身者に分けて、各々の特徴をみたものである。

参考までに記すと、一回生の場合、宗教関係学校出身者は一〇五名（一九％）であり、残りの四五五名（八一％）は非宗教関係学校の出身者である。

グラフCにみられる宗教関係学校出身者と非宗教関係学校出身者のプロフィールには、相当大的な差異が認められ



る。

概して言えば、宗教関係学校出身者のプロフィールは好意的意見群の数値が高く、中間的意見群から非好意的意見群へはぐっと低くなっている。

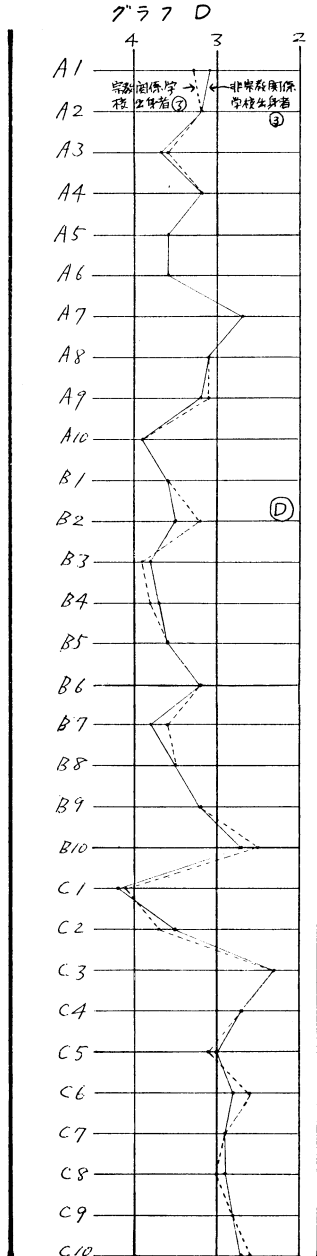
そして、その度合いは、前項でみた三回生のプロフィールよりもさらに大きく、とりわけA1・A2・A3のような、仏教への主体的なかわりをふまえた好意的意見群での肯定度が高く、A5・A6も高い数値を示している。そして、これに比例する形で、好意的意見のなかではA8のような「先祖供養は当然」とする考えや、A10のような心情的な評価、さらには非好意的意見群のC3・C5・C6・C8・C10といった項目への肯定度も低くなっている。

もとより、一回の調査で宗教関係学校出身者とそうでない者との差を過大に評価することはできないが、今回の調査に限って言えば、高校で何らかの宗教教育をうけてきたと推定される学生とそうでない学生との間には、その宗教

的態度のうえにかなり明瞭な差がみられるのである。

④ 出身学校別の結果とその傾向——三回生について——

さて、次のグラフDは、三回生の調査人員四三九名を、グラフCの場合と同じく宗教関係学校出身者と非宗教関係学校出身者とに分けて比較したものである。



両者の比率は、宗教関係学校出身者が八十名（一八%）非宗教関係学校出身者三五九名（八二%）であり、比率は一回生の場合と殆んど同じである。

ただ、このグラフは、調査対象が同じでないということ、つまり、ある一定の年度の入学者を追跡して調査したものの比較ではないので、もし年度毎に学生の特徴があるとすれば、そういった点を考慮して吟味する必要もあること

を最初に諒解していただいたうえで、若干の私見を申し述べることにしたい。

まず総体的に言えることは、宗教関係学校出身者と非宗教関係学校出身者の差が一回生のグラフに比して著しく接近していることである。

そして、その接近の傾向は、宗教関係学校出身者のプロフィールへむけてサヤ寄せする形で推移しており、非宗教関係学校出身者の態度が好意的見解の増大と非好意的意見への肯定度低下という傾向を明瞭にもちながら推移していることがうかがわれる。

このことは、CとDの二つのグラフを比較してみるとさらに明確になる。

すなわち、CとDのグラフを比較してみると、最も顕著な変化がみられるのは非宗教関係学校出身者のプロフィールであり、その変化は着実に好意的態度の増加という傾向を示している。

この傾向は、好意的意見群から非好意的意見群に至る全体を網羅しているが、とりわけ非好意的意見群を中心とする変化が顕著である。

これに対して、宗教関係学校出身者のプロフィールは、いささか異った傾向を随所にみせている。

例えば、A2からA10に至る意見群においては概ね三回生よりも一回生の方が肯定度が高くなっており、また、中間的意見群から非好意的意見群においてもこうした傾向が随所にあらわれている。

いま、一例として、その傾向の特に顕著なポイントをあげると、C5（一つの宗教を信じると、その宗教の世界観や人間観に拘束されて自由な生き方ができなくなり、何か心の狭い人間になるような気がする）の数値が最も注目される。

他にもC8（神にせよ、仏にせよ、結局は自己の内なるものの投影であり、最後に頼れるのは自分しかない。自己こそ絶対であり、自分の力で充分に生きてゆける）への反応も注目されるが、特にC5の場合は大学全体の数値をも上回っている点か

注意を惹く。

果して、このC5の変化が、自己の経験の深まりに伴う実感として出てきたものか、あるいは、社会における宗教信仰者の生活態度等に視野がひらけてくるにしたがって、その在り方や一部の狂信的な態度への批判が生じてきたものは不明であるが、いずれにしてもこの項目への反応が非宗教関係学校出身者の場合は一応了解できる妥当な推移を示しているだけに、この宗教関係学校出身者の数値が注目されるのである。

C5ほど顕著ではなくとも、概して宗教関係学校出身者の数値は、さきにも述べたように、一回生に比して三回生の方が好意的態度が低下しているという、いわば退行現象とも呼びうる傾向を示している。

これが、いかなる要因によるものかは、勿論ここで説明するだけの資料をもたないが、もし勝手な推測を許していただくなら、いくつかの要因が考えられないわけではない。

その一つは、まず、この項の最初に諒解を得たような、年度毎の学生の意識の差異が考えられるのであり、第二には、あるいは、大学生活の一種の中だるみ期のような現象を想定することもできるであろうが、いずれにしてもこれは全く私の勝手な推測であって、こうした点については今後の研究の累積によって説明してゆかねばならない。

尚、もう一つ、第三の推測としてこれは京都女子大学の宗教教育のあり方に関わることであるが、例えば仏教学講義とか礼拝のような全体に及ぶ宗教教育の機会が、二回生にはおこなわれていないことである。おそらく、もし宗教教育というものが、特に学校教育のワクの中でおこなわれる場合、継続しておこなわれることが、その成果を左右するとするならば、少くとも三回生については、調査時期が年度初めであったことを考えあわせると、二回生における一年間の空白が影響していることも考えられよう。

そして、この影響は、高校時代の三年間に継続した宗教教育をうけてきた宗教関係学校出身者に反動的に現れてい

することも充分想像しうるところである。

これは、最初に指摘した通り、学生の宗教への好意的態度が多分に知的あるいは心情的な関与を中心としたものであり、主体的な態度の確立にまで至ることの困難さを示していることを考慮に入れると、学校教育における宗教教育の一つの問題点を暗示しているとも受けとめることができよう。

二、この調査の今後の課題等について

以上、京都女子大学における宗教意識調査の第一回本調査結果から、その一部について、ささやかな私見を添えて若干の資料を紹介したが、この研究の成果は、何よりも今後の資料の集積にかかっている。

さしあたっては、京都女子大学での年次計画による調査の継続と平行して、他大学での調査を早急に実施し、さらに詳細な検討を加えることによって、宗教教育のための基礎資料としての充実を期したいと考えている。

しかし、同時に、この調査表T—1の設問項目についても再検討の余地があることを感じており、これらの点もあわせて今後の課題として研究をつづけてゆきたい。

最後に、この発表を機会に、本調査に対するご意見など御教示たまわりたく、また、宗門関係の諸大学においてもこの種の宗教意識調査の御経験をおもちの方がおられれば、種々ご指導いただくようお願い申しあげたい。